

「医者の話」と「免償説教家の話」における若者の「死」と「経験」について

Murdering Youth and Experience in “The Physician’s Tale” and “The Pardoner’s Tale”

本田 崇洋

福島工業高等専門学校一般教科

HONDA Takahiro

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

(2021年9月6日受理)

In “The Physician’s Tale” and “The Pardoner’s Tale”, which are categorized as Fragment VI, we can find the unified theme of murdering youth: in “The Physician’s Tale”, a virtuous young lady, Virginia, made a choice to be killed by her father to avoid a corrupt judge Appius’ demand, and in “The Pardoner’s Tale”, three young reprobates murdered each other to be deprived of gold. The deaths are brought about due to obeying her virtue and their vice. In other words, it is necessarily that the deaths are caused. “Youth” means “less-experience”. The process can be interpreted as “logical”. At the same time, Chaucer describes “old age” in the two tales, contrastive to “youth”, and suggests the practical wisdom based on “experience”. It implies that the “experience” can give the possibility of avoiding the peril of losing man’s life in his actual world, which is filled with intrigue and malice, for example, people deceive each other or eliminate them to get a higher position, like a court or the business world. In order to remain alive in his world, the practical wisdom, “experience”, contrastive to symbol of youth, can be far more significant than “logical” teaching like the moral tale about virtue or vice.

Key words: death, experience, youth, old age

I

ジェフリー・チョーサーは喜劇の詩人と評される。人間を鋭い洞察力から生まれる彼の特有の皮肉とユーモア、はっきりと物を言わないが、分かる人には分かる絶妙な曖昧性、こうした表現からチョーサーの笑いは生まれる。『カンタベリー物語』では、人間の本質を突いたチョーサーの笑いを多く見ることができる。晩年に創作されたこの作品は、チョーサーの人生観を反映しているが、彼の笑いの表現も同様に人生に対する見方が反映されている。一方で、『カンタベリー物語』には、死を扱う話を多くみることができる。それは、決まって、人間の自然死ではなく、悪徳行為に起因する殺人である。¹

『カンタベリー物語』には、楽しさと悲しみが同時に表現されており、不安定に流転するその様子は、人生、人間社会、人間そのものの姿を象徴しているように見えるのである。

『カンタベリー物語』の特徴の一つとして、未完の作品であることが挙げられる。この物語では、およそ三十人の巡礼一行が、カンタベリー大聖堂への行きに二回、帰りに二回、巡礼者が話をする決まりである。そのため、本来であれば、百二十の物語がここに収められることになっていたはずである。実際、二四話の物語（「ジェネラル・プロローグ」と「取り消しの言葉」を除く）が残されているだけである。

『カンタベリー物語』では、例えば、ある一人の巡礼者が物語を語る。その物語の内容を受けて、他の巡礼者たちが、感想を述べたり、その内容に反応する。『カンタベリー物語』の構造は、物語の内容を受け継ぎ、巡礼

¹ 本田崇洋「“The Monk’s Tale”の“modern instances”の裏切りと殺人について— The Canterbury Tales の巡礼との関わり—」(OLIVA 19号, 関東学院大学英米文学学会, 2013.)

者が物語を述べる、いわば、リレー形式で物語が語られている。例えば、粉屋が話す物語は、大工を馬鹿にしたファブリオーである。その話を聞いた、元大工の荘園管理人は怒り、仕返しに粉屋を愚弄する物語を語る。このように、一つの物語が、次の物語に関わりを持っている。物語のテーマやモチーフが引き継がれ、それらが連結し、表現を変容しながら、それぞれ物語は続いているのである。

しかしながら、結局、『カンタベリー物語』は、断片的に物語が残っているだけである。『カンタベリー物語』の中には、巡礼者が語る物語が群としてまとまっている場合もあり、そうでない場合もある。その断片の集まりを、「フラグメント」と呼ぶ。²『カンタベリー物語』にはフラグメントIからフラグメントXまでである。本論では、「医者の話」と「免償説教家の話」がまとまっているフラグメントVIを取り上げる。これまで、この二つ物語がどのように関係し合っているかについては明確な結論は導かれていない。³本論では、『カンタベリー物語』のフラグメントVIの物語の関係性から見える「死」のテーマを考察する。二つの物語で描かれる「死」にチャーサーの人生観がどのように反映されているかを論じたい。

II

まずは、「医者の話」と「免償説教家の話」の流れとその繋がりを明らかにしたい。「医者の話」は次のような話である。騎士ウィルジニウスがいた。彼には一人の娘であるウィルジニアがいた。彼女の容姿は美しく、同時に人の振る舞いや言動も完璧である。ある時に、娘と母は町へ出かける。そのとき、ある判事がウィルジニアを目にする。彼はアッピウスと言う名の悪徳の判事である。

アッピウスは娘を見て欲情し、何とかして自分のものにしようとする。しかし、アッピウスは、ウィルジニアは確乎不拔の精神の持ち主であり、誘惑して犯したところで、自分のものにできないことは十分知っている。そこで、アッピウスは、この欲情を満たすために、クラウドィウスと呼ばれる男と共謀する。この判事が法廷で訴訟事件に判決を下しているとき、アッピウスと共謀したクラウドィウスが法廷へ入って来る。クラウドィウスはアッピウスにある告訴に対する裁きを求める。その告

訴状の内容とは、騎士ウィルジニウスの娘は、実はアッピウスの奴隷であり、幼少の頃に、ウィルジニウスによって盗まれたという内容である。そこで、判事アッピウスは、娘をクラウドィウスへ返し、自分の保護下におくよう命じる。これは、偽りの事実には込まれた策だと知ったウィルジニウスは、娘をアッピウスへ引き渡す事態を避けられないと悟る。そこで、ウィルジニウスは、娘ウィルジニアに、「恥辱」か「死」かの二つの選択肢を与える。つまり、素直にアッピウスの欲望の奴隷になるか、または、それを拒否して死を選ぶかの二つである。娘はどうして死ななければならぬのか、どのような救済もないのか、と懇願したが、結局、死を選ぶことにする。父は娘の首を切り、判事のもとへ首をもって出頭する。同情した人々が騎士を救うために押し入って来る。アッピウスは投獄され、牢獄の中で自殺してしまった。

この医者のお話を聞いた巡礼者たちの反応はどうであったか。宿屋の主人は、悪徳判事に暴言を吐き、娘の悲運を嘆き悲しむ。この話を受けて、次の物語の話手である免償説教家は、今度は何か面白い猥談を話すように求められる。しかし、上品な巡礼者たちによって「知恵が得られる何か為になる話」(“som moral thyng, that we may leere” (IV. 325)) が要求され、それに応じる。

その後、免償説教家は、自分の物語を語る前に、これまでの自身の悪どい説教を赤裸々に告白する。免償説教家は自分が強欲であることを認識しながら、「金銭を愛することは全ての悪である」という説教をする。貪欲とその悪が、説教の全てであり、目的はお金を集めること、罪の矯正のためではない。

その後、免償説教家は自分の物語を語る。その内容は以下の通りである。愚行を重ねる三人の若者がいた。三人の悪人の若者は一時課まで居酒屋で飲んでいる。そのとき若者は墓地へ運ばれる遺骨に気づく。若者の一人が気になり、その詳細を尋ねる。死んだ者はその若者たちの幼馴染である。死神が来て、槍で心臓を突き刺した。昨夜ひどく酔っ払って、腰掛けに座っていたところを、突然に殺されたということである。死神はこの黒死病の流行中、また村中の男、女、子供、下女、下男、全て殺した。若者たちはその話を聞くと、この反逆者を殺そうと決めて、死神を探しに出かける。その途中で貧しそうな老人に出会う。若者の一人が老人に悪態をつく。この怪しい老人は、インドまで歩いており、自分の老齢と若さを交換してくれる人に出会うまで、歩き彷徨い続けている。若者たちはこの老人を死神のスパイと思い込む。老人は死神の居場所を知っていると言い、今さっき、死

² 本稿のチャーサーのテキストは Benson, L. D., ed. *The Riverside Chaucer*. 3rd edn. (Oxford University Press, 2008) による。

³ Benson, 901.

神に会ってきたばかりの居場所を教える。若者は言われた場所へ向かった。その場所には、フロリン金貨、八ブッフエルを見つけた。若者三人は死神など忘れて、この金に喜んだ。

若者の一人が、この金は夜に運び出そうと提案する。籤を引いて、それを当てた者が、町に行ってパンとワインを買ってくることにする。残りの二人はこの宝を守っておく。籤で当たりを引いた若者一人が、町へパンとワインを買いに行く。宝物を守っている残り二人の内、一人が、この宝を三人で分けるより、二人で山分けすることを提案する。つまり、町へ向かった者が帰ってきたら、二人で殺してしまおうと企む。一方で、町へ買い物に行った若者は、金貨を独り占めしようと計画する。町で毒薬を買い、ワイン三本の瓶のうち、二本の瓶にその毒薬を混入する。毒薬入りのワインを、居残り二人に飲ませて殺すためである。一人の若者が仲間のもとへ戻って来る。すぐに、二人は彼を殺す。二人は、彼が買ってきたワインを飲む。その二本は毒薬入りのワインである。二人とも即死した。結局、死神を探しに出かけた若者は、全滅したのであった。

III

「医者の話」に関して、グレイは “This violent and disturbing tale has never been a favorite with readers, and critics have often condemned it as confused and unsuccessful.” と述べている。⁴ この救いようのない物語を聞き、それとは違う内容の物語が求められたにも関わらず、続く物語は、お互い騙し合い残虐に殺し合う話であった。「医者の話」と「免償説教家の話」で共通点は、登場人物が殺されていることである。ウィルジニアは、自身の意思で死を選んだことではあるが、結局は父親に殺されている。⁵ また、「免償説教家の話」では、悪党の三人の若者が、お互いに殺し合う。さらに注意すべきは、殺された人物はどれも「若者」という点である。

例えば、中世文学における「若者」の特徴は、
“Medieval proverbs say that youth is frail, reckless, seldom

takes heed of perils.” または “It is regularly associated with love and springtime” であろう。⁶ フラグメントVIのように二つの物語が連結した中で見た場合、二人の若者たちは対照的に配置されていることが分かる。ウィルジニアは心も外見も美しい気高い少女である。一方、三人は悪行に耽る若者である。チャーサーは、二つの物語の連結によって、「若者」を一つのタイプで捉えるのではなく、聖と悪、女性、男性というように「若者」を多面的に捉えている。

両方の物語の若者が殺された経緯を見ると、その原因には必然性が伴われていることが分かる。それは避けることのできない運命と言い換えることができる。「医者の話」を聞いて、巡礼者の一人である宿屋の主人は、自然の女神と運命の女神の贈り物は、多くの生き物にとって死の原因であると嘆いている (VI. 295-6)。そもそも、自然の女神によって創造された美貌を持っていなければ、悪人の判事に目をつけられることはなかったはずである。運命の女神の言及もまた、死の必然的な結果を示唆している。チャーサーの作品において、運命の女神による没落は、「修道士の話」でもそうであるが、必然的な原因を見出すことができるからである。⁷ また、アッピウスの欲望に従うという恥辱を選ぶことは、彼女の美德からはありえない選択肢である。美貌と美德を持ち合わせるウィルジニウスそのものは、最初から死に結びつく可能性をもっていたということである。

「免償説教家の話」の三人の悪党に関しても、説教的な物語として見れば、悪人の滅亡は必然的な結果である。逆の見方をすれば、彼らは滅びるための罪を多く犯しているからである。

自身美貌が原因で、また美德を貫くゆえに「死」を選ぶ、また、罪深い魂ゆえに「死」に至る。いずれも、死には「必然」が伴っていることが分かる。この二つの物語には、物事への結果とその原因が明確に示されている。必然性をもって結果を示す、これは「理論」的であると言える。

IV

しかしながら、チャーサーは、この二つの物語で避け

⁴ Douglas Gray, ed. *The Oxford Companion to Chaucer*. (Oxford: Oxford University Press, 2003) 380

⁵ ヴァルジニアの最後の振る舞いについてグレイは以下のように述べている。“Virginia acts from honour, but not from a narrow code of honour, rather from a moral revulsion, in which Chaucer has blended ancient Roman honour and sense of justice with a hatred of lechery and an admiration for chastity which would have been familiar to the audience used to medieval Christian religious writing.”

(Gray, 380)

⁶ Gray, 500.

⁷ 本田崇洋「“The Monk's Tale”の“modern instances”の裏切りと殺人について— The Canterbury Tales の巡礼との関わり—」(OLIVA 19号, 関東学院大学英米文学学会, 2013.)

られない運命を描きながらも、同時に、死を回避できる可能性も暗示している。その可能性は、「理論」とは対照的な「実践」や「経験」に基づく知識である。⁸

「医者の話」で、貴族の娘を育成するという意味で、チョーサーは“maisterie” (VI.58) という語を使用している。“maisterie”は、現代英語では“mastery”に当たり、*OED*では“the state of condition of being master, controller, or ruler: authority, sway, dominion, an instance of this”とある。「医者の話」では、チョーサーは他にも、「養育する」という意味で、“in governaunce” (VI. 73) という語を使用している。すなわち、ここで言う「(娘を) 育てる」ことは、「制御できる状態にあること」、「支配できている状態である」を意味している。

また、チョーサーは、貴族の娘を養育する者を“ye maistresses, in youre olde lyf” (VI. 72) ”と述べている。養育者は「老人」である。一般的に、老人と若者には、「経験」に差があることは明らかである。人生経験の多い年長者に、子供を養育することは適切であろう。

チョーサーは、老人が若者の育成への責任を負うことができるは、次の二つであると述べる。老人である育成者が徳を遵守している人物か、それとも、若い時分に、恋愛の道を極め、その手練手管に熟知しており、現在はその色恋の道から完全に足を洗っている老人のどちらかである。つまり、養育者が未経験のことを教えるか、経験したことを教えるか、である。

さらに、チョーサーは、若者の育成に適切な年寄りの特徴を次のように述べる。

a thief of venysoun, that hath forlaft
His likerousnesse and al his olde craft,
Kan kepe a forest best of any man.
Now kepeth wel, for if ye wole, ye kan.
Looke wel that ye unto no vice assente,
Lest ye be dampned for youre wikke entente;
(VI. 83-8)

「盗む欲望が無くなり、盗みを止めた鹿泥棒は、誰よりも森をしっかり守ることができる。」と語られているが、ここから読み取れることは、「理論」とは異なる、「経

験」の重要性である。盗みを極めた人間も、その技術を熟知している。ある道を極めた者であれば、その技術や知識が十分にある。問題は、その道が、いわゆる道徳的な世界か、不道徳な世界のどちらかに属しているかということである。徳のある世界で身につけた技術や知識であれば、養育者として子供に教えることは何の問題もない。通常、育成者が人格者である場合、その教えは「経験」や「実践」ではなく、理論上の言葉としての教えである。単なる人格者の言葉は、「理論」に偏重している一方で、醜行を極めた者は、悪行に精通している同じ同業者がどのような思考をもっているか、どのような行為を行うかを見抜くことができる。結果として、悪行から守ることができる。実体験を通じて若者を育成する老人は、「経験」の象徴であると言える。

例えば、五回結婚したバースの女房が、自身の穏やかではない人生を独白するとき、開口一番の言葉は“Experience, though noon auctoritee / Were in this world, is right ynogh for me / To speke of wo that is in mariage;” (III. 1-3)であった。自分の結婚生活を語るときには、偉い人の言葉より、自分の経験で十分であると言う。自分の人生を語る上で聴衆に説得力を与えるには“auctoritee”よりも“experience”の方が重要と言うのである。チョーサー作品において、人間社会を生きる上で“experience”の価値を重視していたことが分かる。

V

「免償説教家の話」の経験と実践はどのように描かれているのか。免償説教家は物語を語る前に、自分の説教の技術を紹介する。「金銭を愛することは全ての悪である」がテーマでありながら、彼にとって、自身の説教の目的はお金を集めることで、罪の矯正のためではない。人々が死んで彷徨う魂などはどうでもよい。免償説教家の矛盾した説教の技術は、自身の腐敗した精神に基づくものである。⁹

免償説教家は、ローマ教皇や枢機卿の勅書を聴衆にこれ見よがしに示す。権威を示すことで、文句を言わせないためである。他にも、自身の説教に色をつけるためにラテン語を二、三語、喋る。それだけで信心を促すことができる。ただのボロ切れや骨がいっぱい入ったガラス

his extensive reading.)”(Gray, 172)

⁹ 免償説教家の独白の意味ついて、グレイは“What is clear is that the tale firmly draws attention to the question of morality of art by making a ‘ful vicious man’ tell a powerful moral tale.”と指摘している。(Gray, 364)

⁸ チョーサー作品にとって、“experience”と“authority”は主要なテーマの一つであり、グレイは以下のように述べている。“The opposition of ‘experience’ and ‘authority’ has been taken up by critics, who points out Chaucer’s characteristic balance of the observation of life (perhaps encouraged the offices he held and the fruits of

の箱、真鍮にはめこんだ肩甲骨といった、偽の聖遺物を見せたり、嘘八百を述べる。首を伸ばして、聴衆を見下ろしながら、右へ左へ頷いてみせる舌と手をすばやく動かす。その動きを見て聴衆は喜ぶ。免償説教家の独白が示すことは、説教を通して聴衆が喜ぶものを知っていること、また、どのようにすれば聴衆が金を出すのかを知っているということである。この説教家は、本来の説教は無視して、金を得るための技術を磨くことに集中しているわけである。ある意味では、これは商人の目線である。

他にも、貪欲に基づいた奇跡的な恩寵は続く。この骨を井戸の中で洗っておけば、あらゆる傷も治る。それどころか、その水を飲めば、家畜や資産が増える。嫉妬も治る。司祭を二、三人連れ込んだ妻も許せる。ここに、長手袋がある。この手袋に手を入れ、お金を寄付さえすれば、穀物が増やせる。立て続けてこのような出鱈目を言う。当然、このような胡散臭い効果に恩寵などあるわけではない。

奇跡的な恩寵がもたらされなかった場合にも、この説教家は逃げ道を用意してあることを読み取ることができる。免償説教家は、「恐ろしい罪を犯しておりながら、恥のために告解していない人、または司教と浮気をした女性がいたら、聖遺物に対して恩寵も力もない。」

(VI.377-384) と言う。実際、説教家が言うような馬鹿馬鹿しい効果などありえないと考えるのが自然である。しかし、この説教家は、今だに、免償説教家として生き残っているのである。つまり、誰も公に免償説教家に文句を彼に言ってこないということである。公に彼の不正を言えない人たちは、恥のために告解していない、司教と浮気をした女性である。チョーサーが見た世界には、恥のために告解をしていない人間や、浮気をする女性を数多くいたということになる。免償説教家は独白する前に、次のように言う。

For though myself be a ful vicious man,
A moral tale yet I yow telle kan,
Which I am wont to preche for to wyne.

(VI. 459-61)

「自分は非常に不道徳な人間ではあるが、金儲けのためにしている道徳話をすることはできる。」と語っている。免償説教家の言葉は、実践によって得られた知識である。悪を経験した者のみが、その悪の真実を語れるのである。

「医者の話」で示唆された「経験」と同じであり、この説教家の独白は、「経験」であり、善人を導く説教の「理論」ではない。免償説教家は墮落した聖職者であるが、

事実、金を稼いでいる。つまり、欲望が叶っているわけであり、それは実践の成功を示していることになる。チョーサーの免償説教家のキャラクターに関して、

“Chaucer has transformed a conventional type into a figure of great vitality and individuality.”と指摘されているように、免償説教家の人物像は、『薔薇物語』のFaux Semblantに由来しながらも、コンベンションの枠を超えて、現実世界に根付く、人間の生々しい印象を与えている。¹⁰

免償説教家が物語を語る前の言葉に注意したい。彼は、“som moral thyng, that we may leere” (IV. 325) と述べていた。“leere”は現代英語で“learn”である。ここでの意味は、*OED* では“learn”は“to acquire knowledge of (a subject) or skill in (an art, etc.) as a result of study, experience, or teaching.”とある。*OED*の定義のように、また、現代英語でもそうであるが、“learn”ということは、経験や実践を通して身につける意味での「学ぶ」である。つまりは、そもそも、免償説教家が話そうとしていたのは、経験と実践に基づいた知恵であったことが理解できる。

「医者の話」において、「経験」を象徴する年寄りの養育者について言及したが、「免償説教家の話」にも謎の老人が登場する。この老人は、村中の者たちが死神に殺されている中でも生きています。正確に言えば、「生き抜いている」、「生き残っている」と捉えるのが正しいかもしれない。老人の振る舞いは、若者と対照的で、物静かで、礼儀を心得ている。若者たちは、死神の噂を聞いたなら、ただ感情に任せて殺しに行くという短絡的な人間である。この老人は、死神が彷徨う世界の中で、生き抜くための何からかの知恵と経験、加えて、狡猾さを持ち合わせているのである。この老人もまた、「経験」を象徴していると言えよう。確かに中世文学において、一般的には、“the connection of old age with long experience and wisdom can be equally formulaic.”と言われている。¹¹ チョーサーの二つの物語の場合、人生を正しく生きた結果、正しい知恵をもっている経験者というよりは、悪徳を通して、生き残っていた実践的な知恵を示している。

VI

「経験」が生きる上で重要であること、それは別の視点から言えば、生きる世界が危険に満ちていることを意味している。つまり、裏切り、策略に満ちた、陰謀渦めく世界、宮廷世界を意識していると言えよう。また、ワ

¹⁰ Gray, 364

¹¹ Gray, 355

イン商人出身であったチャーサーにとって、商人の世界もそのように見えていたかもしれない。商売の世界で、無知な商人は、有能な商人にただカモにされるだけである。その世界で自身を守り、生き残るためには、権威のある、書物からの知識とまた別次元の知恵が必要であるのは当然である。

免償説教家の場合、彼はローマ教皇の勅書を見せる理由を、これは自分の身を守るためと述べている。免償説教家の言葉は、権威の実用性、実務的な使い方、本来の役割とは全く異なるが、互いに憎しみ合い嫉妬に満ちた人間世界において、権威を一つの生きる手段として使用していたことを示している。これは、自分を守るために、すなわち、生き抜くために、人間社会ではよく見られることであろう。

この二つの物語にある「殺人」に関して、そこには「権威」を行使する背景が仄めかされている。「医者の話」では、悪人のアップウスは判事である。原則的には、彼の判決はどのようなものであれ、従わなくてはならない。「免償説教家の話」では、より宮廷への意識を垣間見ることができる。例えば、物語の最中に、免償説教家は、暴飲暴食、賭博、誓いの乱発と偽誓といった説教を始める。その時の言葉は、権威者に向けた説教であることがわかる。例えば、酒の飲み過ぎにより鼻血を出して死んだアッチラを例に出し、「指揮者はしらふでないといけない」(VI. 582)、賭博に関して、あるスパルタ人が同盟を結ぶためにコリントへ派遣されたとき、その国の最上位の人々は賭博に耽っていた話を出しながら、「もし王侯が賭博をするのであれば、評判を落とす」(VI. 599-602)と述べている。

「医者の話」は判事と、「免償説教家の話」では悪人が策を練り、殺人を引き起こす。その背景には「権威」と「力」を彷彿とさせるものがある。それぞれの話で死に直結する背景は、結局のところ、宮廷を想起させるようにできている。策略に満ちた世界、宮廷のような権威を暗示させる、権威と結びつくような世界である。いわば、架空の物語の中で、チャーサーの生きている世界が示唆的に反映されているのである。

連結する二つの物語、「医者の話」と「免償説教家の話」は若者の死という一つのテーマとして結びついている。物語の表層では、美德や悪徳による必然的な結果による「理論」を見ることができる。しかし、同時に、経験による実践的な知恵が示されている。美德や悪徳とは別の視点として、特に危険を回避する実践的な知恵である。

「若者」である以上、知識や精神が高い低いとは別として、「経験」は自ずと欠如しているものである。この二つの物語で意味する「若者」は、実践的な経験が脆弱な者、ある道に関して無知な者、更に言えば、相手側の騙しに対して自身を守れない者を示している。ヴィルジニアが自ら死を選んだ点は重要である。逆に言えば、父の意見に逆らうこと、つまりそれ以外の道知らなかったわけである。父は徳を備えた立派な騎士である。しかし、それ以外の手段を知らなかった。商売の世界を見て育ち、宮廷の世界に生きたチャーサーにとって、人間の策略に満ちた世界を生きることは理屈通りでは済まないことは、身に染みて理解しているはずである。その世界、策略、裏切りと権威と枠組みの中で、生き抜くには、経験と実践が必要なのである。これは、ウィルジニアのような美德と理念だけでは、死に直結してしまうというチャーサーの意識の表れであろう。

悪徳に染めた者しかもっていない技術や知識を教えること、これに関して、チャーサーは「どんな悪徳にも同調しないように気をつけなさい、邪悪な意図をもってしていると非難されてしまうから。」(VI.87-8)と言う。悪徳へ同調すること、邪悪な意図を持つことは当然許されないが、悪徳に同調しない場合においては、実践上、過去の「経験」は最上の武器となると言えよう。これは筋の通った、単なる「理論」とは異なる性質をもつ。

チャーサーは、不条理な世界、策略に満ちた世界の中で生きる、生き残るという意味はどういうものかを示している。これはチャーサーの現実社会の物事の動き、人間の思惑で作られているその世界において、理屈通りでは何の役にも立たない、それは死を意味し、ある世界を生き抜くという実践的な知恵は、場合によっては、権威から示される理論的な教えよりもはるかに重要であるというチャーサーの冷たい皮肉であると言えよう。

本論では、「医者の話」と「免償説教家の話」の繋がりに焦点を当てたため、フラグメントVIのみの扱いであった。宮廷の世界で「生き残った」晩年のチャーサーが『カンタベリー物語』の全体で「年寄り」と「若者」の特徴をどのように描いているのか、熟年に達した人生の重み、「老年」に反射する「若者」の光をチャーサーはどのような意識で物語を創作していたのかについては次回の考察にしたい。

参考文献

- 1) Baldwin, Charles Sears. *Medieval Rhetoric and Poetic (to 1400), Interpreted from Representative Works*. The

- Macmillan Company, 1928.
- 2) Benson, L. D., ed. *The Riverside Chaucer*. 3rd edn. Oxford University Press, 1987.
 - 3) Boitani, P. and A. Tort., eds. *Intellectuals and Writers in Fourteenth-Century Europe*. Tübingen, 1984.
 - 4) Brewer, Derek. *The World of Chaucer*. D.S. Brewer, 2001.
 - 5) Cooper, Helen. "The Classical Background." *An Oxford Guide to Chaucer*. Ed. Steve Ellis. Oxford University Press, 2005.
 - 6) Crow, M. M. and Olson, C. C., eds. *Life-Records*. Oxford University Press, 1966.
 - 7) Correale, Robert M. ed. *Sources and Analogues of the Canterbury Tales*. vol. 1-2. Woodbridge: D.S. Brewer, 2003.
 - 8) Crow, M. M. and Olson, C. C., eds. *Life-Records*. Oxford University Press, 1966.
 - 9) Dean, Christopher. "Salvation, Damnation and the Role of the Old Man in the 'Pardoner's Tale'." *The Chaucer Review*, vol. 3, no. 1, 1968, pp. 44-49
 - 10) Farber, Lianna. "The Creation of Consent in the 'Physician's Tale'." *The Chaucer Review*, vol. 39, no. 2, 2004, pp.151-164
 - 11) Gray, Douglas, ed. *The Oxford Companion to Chaucer*. Oxford University Press, 2003.
 - 12) Heffernan, Carol Falvo. *Comedy in Chaucer and Boccaccio*. Cambridge: D. S. Brewer, 2009.
 - 13) Kendrick, Laura. "Comedy." *A Companion to Chaucer*. Ed. Peter Brown. Blackwell, 2002.
 - 14) Lee, Brian S. "The Position and Purpose of the 'Physician's Tale'." *The Chaucer Review*, vol. 22, no. 2, 2018, pp. 141-160
 - 15) Mandel, Jerome. "Governance in the 'Physician's Tale'." *The Chaucer Review*, vol. 10, no. 4, 1976, pp. 316-325
 - 16) Merrix, Robert P. "Sermon Structure in the Pardoner's 'Tale'." *The Chaucer Review*, vol. 17, no. 3, 1983, pp. 235-249
 - 17) Owen, W. J. B. "The Old Man in 'The Pardoner's Tale'." *The Review of English Studies*, vol. 2, no. 5, 1951, pp. 49-55
 - 18) Patch, Howard Rollin. *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature*. Octagon Books, 1967.